

## 実感される「減少」 —平成期の檀信徒データから—

- ・平成となって四半世紀。この間に実施された宗勢調査から、「檀信徒の増減」データに注目すると、その激変に驚かされる。
- ・「檀信徒の減少」が進行しており、その理由として「後継者の断絶」の激増が見てとれる。

平成期に実施された宗勢調査の結果（昭和63年のデータを含む）から、「檀信徒の増減」に関する質問を抽出し、とくに「減少」の数値に注目してその推移をみてみたい。

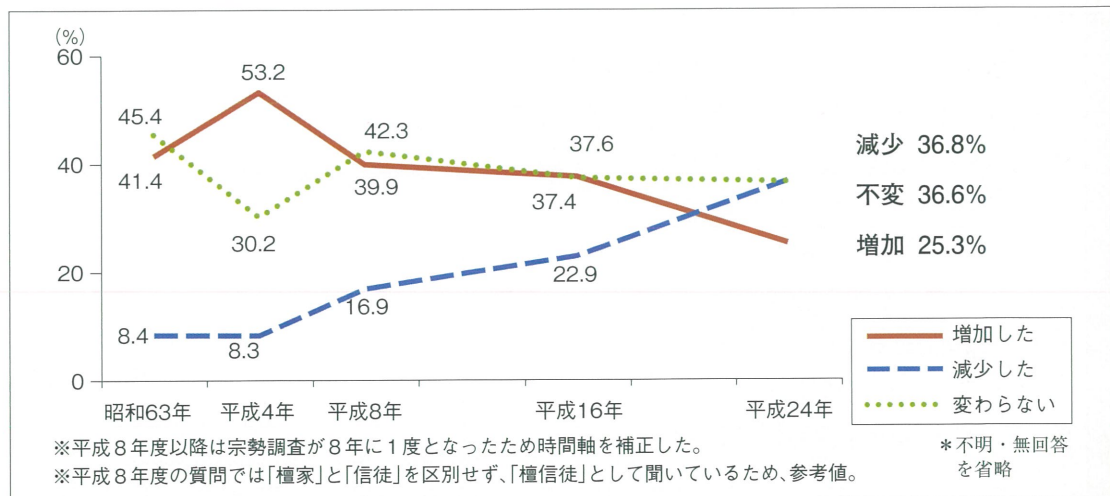
### 1. 檀家の減少

	昭和63年	平成4年	平成8年	平成16年	平成24年
増加した	41.4%	53.2%	39.9%	37.6%	25.3%
減少した	8.4%	8.3%	16.9%	22.9%	36.8%
変わらない	45.4%	30.2%	42.3%	37.4%	36.6%
不明・無回答	4.4%	8.3%	0.8%	2.1%	1.3%

「あなたの寺院では、過去8年間（4年間）、檀家数（檀信徒数）の増減はありましたか」という設問への回答を集計して、百分率で示したのが上記の表である（■1位回答）。

この表を、8年と4年という間隔の差違を補正してグラフにしてみると次のようになる（平成8年は、檀家と信徒を区別しない設問であったため、参考値となる）。（グラフ1-①）

檀家の増減の推移 昭和63～平成24年（グラフ1-①）



平成4年には、檀家が「増加した」53.2%、「減少した」8.3%であった。この辺りで、「宗勢」はピークを迎えていたと言えるのかもしれない。

それからの20年間で、檀家が「増加した」の割合は約30%減少、一方、「減少した」の割合は約30%増加し、逆転するに至ったのである。平成16年から平成24年の8年では、檀家が「増加した」と答えた寺院の割合は12%以上減り、「減少した」が13%以上増えている。この8年間のどこかで、それとは気付かぬうちに、宗門は重大な転換点を経過したと言えるのではないだろうか。

## 檀家減少数

では、減少はどの程度であったのか。先の設問に「減少した」と回答した寺院への「何戸くらい減少しましたか」との問いに対する回答の実数を、過去8年間の減少数を問うた平成16年と24年とで比較してみる。

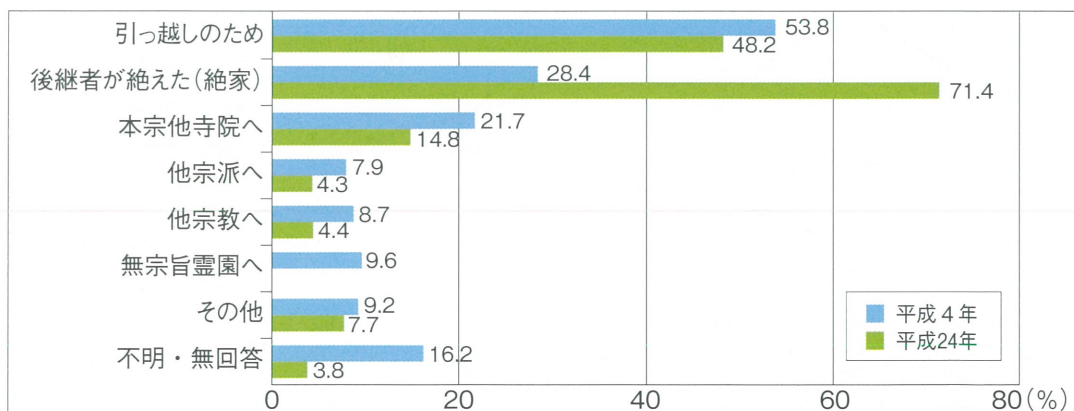
	【平成16年】		【平成24年】
5戸以内	506	→	805
6～10戸	233	→	368 (ヶ寺)

「5戸以内」、「6～10戸」ともに、6割近い増加数を示しており、微減とは言いがたい水準にあると言えよう。

## 檀家減少の理由

減少理由についての質問は、調査年次ごとに、選択肢や単・複数回答の違いがあるため、推移をたどることは困難であるが、回答の選択肢が近似し、ともに複数回答を求めている平成4年と平成24年の調査結果を比較することにより、この20年の変化を見ることは可能である。この比較によれば、「後継者が絶えたため（絶家）」を理由に挙げた割合が、倍以上で、断トツとなった。単純には比べられないが、減少理由を単数回答とした平成16年では「後継者が絶えたため（絶家）」の値は38.5%、「引っ越しのため」が33.6%とやや拮抗していたことを勘案すると、絶家を理由とする檀家減少に拍車がかかり始めていると考えられる。（グラフ1-②）

檀家の減少理由（グラフ1-②）



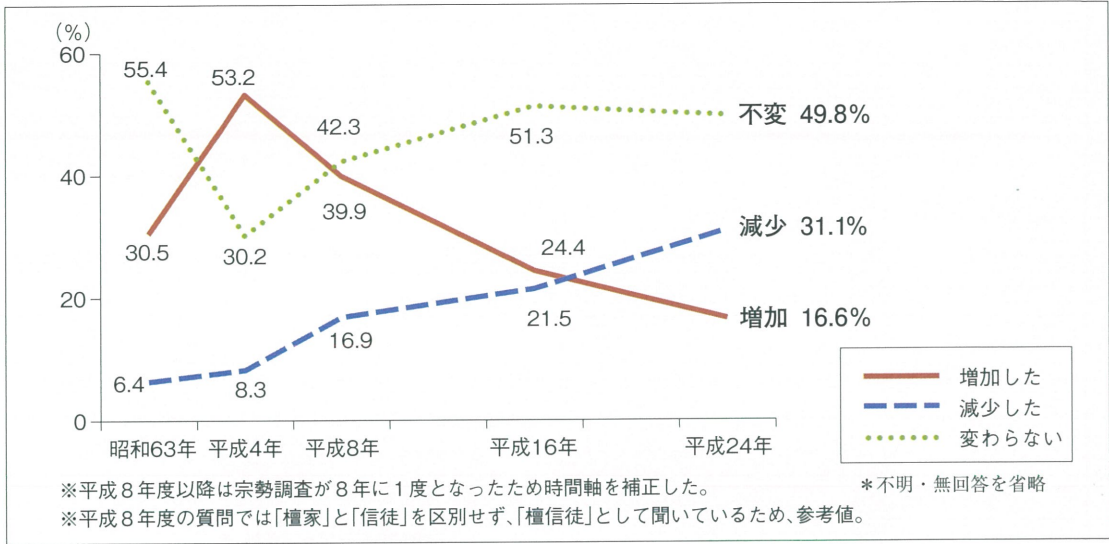
## 2. 信徒の減少

### 信徒減少が拡大

平成期の信徒の増減推移を全体集計からグラフで示すと次のようになる。

(グラフ1-③)

信徒の増減の推移 昭和63～平成24年 (グラフ1-③)



平成16年から24年に掛けて「変わらない」がほぼ半数を占めてはいるものの、「減少した」が増加し、「増加した」が減少するという傾向が明らかであるという点については、信徒数の増減の推移も、檀家数の増減の推移とほぼ同様であると言えるであろう。

信徒数についても、「減少」が「増加」を逆転する現象が、この8年間の間に起こっているのである。

信徒の減少理由は「信徒死亡のため」という回答が65.1%と圧倒的に多く得られている。これは、檀家数減少の理由としても急増していた「後継者が絶えたため（絶家）」に相当するものとしてとらえられるだろう。「家単位の教化から個人単位への教化へ」と布教方法の転換の必要性が叫ばれてはきたが、信徒の代がわりが難しくなるといえる。

「檀信徒の増減」に関する調査結果の推移をみると、極めて厳しい時代に入ったことがうかがえる。全体としての人口減少が始まる以前から、檀信徒の減少を回答した寺院数が増加傾向を持ち始めていたことは、恐らく、地方に於いて、都市部に先立って人口減少が始まっていたことを反映したのもあろうが、今後予想される急激な社会の変化、人口減少に対し、如何に有効な対策を打てるかが、問われるところである。